

中国の歴史と人々に触れて

A2 班 東京科学大学 薄井真帆

このたび、中国政府のご招待を受け、北京および河北省を訪問するという貴重な機会をいただきました。約 1 週間の滞在を通して、中国の歴史や文化、現地の人々との交流を深めることができ、私自身にとって非常に大きな学びと刺激を得る旅となりました。

まず、中国を訪れて最初に強く感じたのは、そのスケールの大きさです。道や建物をはじめ、都市全体が非常に広く、整然としており、物理的な広さとともに、中国が持つ雄大さや悠久の歴史を感じさせる光景に圧倒されました。その印象は、単に目に映る景観だけでなく、人々の考え方や文化の深さにも通じているように思いました。次に、滞在中に訪れた数多くの博物館や展示館では、中国の歴史や思想、政治・文化の背景について深く学ぶことができました。教科書や映像で知っていた知識が、実際の展示物や現地の方の説明にたくさん出てきて非常に興味深かったです。中国語での展示が多く、全てを理解できないのが残念でなりませんでしたが、しかし、自分の目と耳を通して得た実感は、今後の学習や思考の基盤になると確信しています。

また、自身の専攻分野から特に関心を持ったのは、中国に根づく「医食同源」の考え方です。毎日の食事の中に薬膳の要素が自然に取り入れられている様子から、食と健康が密接に結びついている文化が浸透していることを実感しました。街中には漢方薬を扱う薬局が多く、伝統医学が人々の生活に深く根ざしている点も非常に興味深く映りました。西洋医学中心の教育を受けてきた私にとって、こうした伝統的な医学観との出会いは、自分の視野を広げる大きなきっかけとなりました。来年受講する予定の東洋医学の授業が今から待ち遠しいです。

さらに、言語の壁という不安を抱えながらの訪中でしたが、それを上回るほどに現地の人々の温かさに触れることができました。商業施設で出会った方々は私の拙い言葉にも根気強く耳を傾けてくださり、中日友好協会や対外友好協会の方々も大変心のこもったおもてなしをしてくださり非常に感動しました。言葉が通じない中でも、互いに敬意を持ち、真剣に向き合うことで人と人は通じ合えるのだということを実感しました。そのなかでも特に印象的だったのは、北京外国語大学の学生との交流です。外交を担う人材を数多く輩出されている大学で、交流した学生も日々高い意識で学びを深めている姿がとても印象的でした。私たちは、学生生活や部活動の違いといった日常的な話題から、老後の暮らし方のような社会的なテーマまで、幅広い視点で意見を交わしました。異なる国で育ちながらも、共通する悩みや関心を見出し、互いの考えを尊重しながら語り合えたことは、とても貴重で心に残る時間でした。加えて、今回の訪中では、日本全国から集まった多様な背景を持つ学生たちと出会うことができました。私自身、中国語に不安があった中で、言語面でも多くの場面で助けをもらい、とても心強かったです。それぞれ異なる分野や専門を持つ仲間たちと日々を共にするなかで、自分とは異なる視点や考え方に触れ、自分自身の思考の幅も広がっていくのを

感じました。こうした出会いは、今回のプログラムで得た最も大きな宝物の一つです。

最後に、今回の訪中は、単なる海外体験ではなく、私自身が今後どのように国際社会に関わっていくべきかを深く考える契機となりました。今後も医学という専門分野を軸に学びを深めつつ、日中両国の協力と相互理解に貢献できる存在を目指して努力を続けていきたいと思っています。このような貴重な機会を与えてくださった中国政府、日中友好協会をはじめ全ての関係者の皆様、そして共に学び合い、語り合った仲間たちに心から感謝申し上げます。

今回の経験を糧として、自らの言葉で中国の魅力や学びを伝え、日中友好の架け橋となれるよう、今後も真摯に歩んでまいります。

「また訪れたい国中国」

2-A 福井大学 内田優香

私が今回、訪中団に参加した理由は、これまで関わってきた中国の方々の温かさに強く惹かれ、彼らが暮らす環境に対して関心を抱いたからです。大学や留学先で出会った中国人の印象と、メディアを通じて得る中国のイメージとの間に大きなギャップを感じており、現地の実情を自分の五感で確かめたいという思いから、今回の訪中団への参加を決意しました。

もともと中国に対しては、経済発展や最新技術、長い歴史、豊かな食文化など、肯定的な印象を持っており、ネガティブなイメージは抱いていませんでした。そのため、意識が大きく変化することはありませんでしたが、訪中を通じて中国への関心は一層高まりました。

今回の訪中団を通じて印象に残った点は三つです。一つ目は、食文化の豊かさです。訪中時は毎日ターナーテーブルにいっぱいに並ぶ多彩な食材を使った料理で温かくもてなして頂きました。日本料理とは異なる香辛料や油の使い方が印象的で食事のたびに新しい発見がありました。食べることが好きな私にとってはお肉料理、野菜炒め、蒸し料理など、どの料理も大変魅力的で、全てを美味しく頂きました。日本で食べる中華料理とは違った本場の中華料理を堪能できてとても嬉しかったです。また、中国滞在中にひまわりの種を数人からお勧めされ、スーパーマーケットで購入しました。癖になる味で、日本帰国後も定期的に食べたいと思いました。

二つ目は、中国における歴史観が、私が日本で学んできたものとは異なっていたことです。中国共産党歴史展覧館を見学した際、日本では触れることのない視点から語られる歴史に触れ、大きな衝撃を受けました。異なる認識を知り、それを理解しようとする姿勢こそが、真の友好関係を築く第一歩になるのではないかと強く感じました。

終戦から 80 年という節目の年に、訪中団の一員としてこの展覧館を訪れたことに大きな意義を感じました。

三つ目は、同じ東アジアの国でありながら、中国と日本とは全く違う国民性を感じたことです。具体的に言い表すのは難しいのですが、街行く人々の服装や生活風景から、開放的でどこか欧米のような雰囲気を個人的に感じました。こうした感覚は、実際に現地を訪れたからこそ得られた貴重な気づきだったと思います。

訪中団を総合的に振り返って、2 A の班のみんな、そして同部屋の子と毎日過ごせたことがとても楽しく印象に残っています。訪中前はお互いに面識もなかった私たちが、わずか 1 週間のうちに深い絆を築き、大切な思い出を作れたことに不思議さと喜びを感じています。この出会に心から感謝しています。

今回の訪中で、相手の価値観、物事の捉え方の違いを理解し、互いに歩み寄り今後の日中友好を築いていきたいと思いました。さらに、私が見てきた中国の様子を家族、友人など周りの人に伝え、日中友好の輪を広げられるように努力したいです。今回の訪問では、予定変更により見るができなかった場所もあったため、いつか必ず再度中国を訪れ、まだ見ぬ世

界を自分の目で確かめたいという思いが一層強まりました。その際には、中国語を使って現地の方々と会話でもできるように今から練習しようと思いました。最後に、今回、悪天候によるスケジュール変更、トラブル等に見舞われたにも関わらず、安全にそして楽しく1週間を過ごせるようご尽力くださった関係者の方々にお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

「不期而遇」

2-A 立教大学 大内 玲旺

今回、大学生訪中国を通じて私は人との出会いの大切さを学んだ。私がこの訪中国を知ったきっかけとして、私は中国語を高校生から勉強しておりその成果を発表する機会として中国語スピーチコンテストに参加した。その時、ある日中友好ボランティアの人が僕に声をかけてくださり、私はボランティア活動に参加することになった。そしてボランティア活動の際に、その方が今回の訪中国の機会を紹介してくださり、参加したという経緯である。この訪中国では、全国から集まった大学1年生から4年生までの学生たちと、異なる専門分野、異なる価値観、異なる人生背景を持ちながらも、共に生活し、語り合い、笑い合うという貴重な経験ができたと感じる。

正直、参加前は不安もあった。私は少しシャイな性格で、大勢の初対面の人たち、ましてや違う年齢の人たちと一週間を共にするということに緊張していたからである。しかし、時間が経つにつれそういった不安は自然と和らいでいった。朝ごはんを一緒に食べ、日中は観光や企業訪問を通じて中国への理解を深め考えや感じた事を共有し、夜にはその日の出来事を振り返ったり、お互いに自分の人生について語り合った。そうした積み重ねで、お互いの価値観や人生観に触れ、気づけば年齢も大学も関係なく気兼ねなく話せる関係になっていた。特に印象に残っているのは、ある日昼食で、日中ハーフであるメンバーが「日中友好の架け橋になりたい」という自分の使命や夢を語ってくれ、私はそのメンバーの心からの願いに非常に感激した。それに続けてそれぞれのメンバーが建前なしに自分の夢、考え方や悩みを打ち明けたという機会があった。このことを通じて、自分の心を開き、仲間に自分の考えや価値観を伝える、そして誰かの思いを真剣に受け止めるということで、深い信頼関係を築けるということを実感した。

一週間という期間は始まる前は長く感じていたが、終わってから考えると本当にあっという間であった。そして、やはり出会いがあれば別れもある。空港でお別れをした瞬間、最初から分かっていた「お別れの時」が、急に現実として突きつけられた気持ちになり、共に一週間を過ごし思いを共有したという感謝の気持ちもあったが、やはり寂しいの気持ちが強く複雑な感情であった。その時思い出したのが、中国語の成語である「不期而遇」だ。日本語で言えば、「思いがけない出会い」と翻訳できると思う。まさに今回の経験がそれに当てはまると感じた。最初から予定されていたわけでもなく、たまたま訪中国という機会を選んだ者同士が出会い、お互いの人生の夢を語りあう、かけがえのない時間を共有する。これはお互いの人生における何かしらの縁であると思う。もし、私が中国語の勉強を始めなかったらそもそも今回の仲間たちに出会っていないかもしれない。もし、日中友好ボランティアの方が私に声をかけてくれなかったら、そもそも今回の機会を知れなかったかもしれない。一人ひとりが違った道を歩んできたからこそ、その人生の道の交差点で生まれる出会い、そしてお互いにそれぞれの人生観を共有することには意味があり、価値があり、かけがえのない

ものなのだと思う。

最後に、この出会いに感謝を伝えたい。共に笑い、共に悩み、共に歩んだ仲間たちへ。そして、このような出会いの場を提供してくれたすべての関係者の方々へ。私にとってこの一週間は、人生の中でも特別な時間として、ずっと心に残り続ける確信する。そして、これからも私は、不期而遇を大切にしながら、自分の人生を歩んでいきたい。

生で見る中国

法政大学 4 年小野心寧

このたび中国訪中団の一員として北京を訪れ、現地の大学や企業、文化施設への訪問を通して、多くの学びと気づきを得ることができました。訪問前の私は、中国に対して政治的に閉鎖的、やや攻撃的というようなネガティブなイメージを持っていました。しかし実際に現地に足を運び、自分の目で見て、現地の人々と交流したことで、その印象は大きく覆されました。

最も印象に残っているのは、北京外国語大学の訪問です。大学構内は美しく整備されており、開放的な雰囲気が印象的でした。何よりも、交流会で出会った学生たちの語学力と積極性に驚かされました。日本語や英語を自在に使いこなしながら、こちらの話にも熱心に耳を傾け、自分たちの考えを堂々と伝える姿は非常に頼もしく感じられました。ディスカッションでは、国際問題や学生生活、将来のキャリアなど幅広いテーマについて話し合い、文化や価値観の違いを超えて通じ合えることの楽しさと可能性を実感しました。

また、授業で使用するタブレットやデジタル教材を製造・提供している教育系企業の訪問も非常に興味深い経験となりました。中国では ICT 教育が急速に進んでおり、都市部だけでなく地方の学校でも教育用タブレットが導入されているとのことでした。企業は単に機器を提供するだけでなく、包括的な支援を行っており、国家全体で教育の質を高めようとする姿勢が強く感じられました。教育分野への本気の投資とスピード感ある取り組みに、日本との違いや課題も浮き彫りになり、多くの刺激を受けました。

加えて、中国共産党の歴史を紹介する記念館も訪問しました。展示では、近代以降の中国の歴史や政治的な歩みが詳細に紹介されており、視覚的にわかりやすい映像や模型も活用されていました。こうした施設を実際に訪れ、自国の歴史をどう伝えているかを直接見て感じることで、他国の視点や価値観を知る重要性を改めて実感しました。日本とは全く異なる政治体制の中で人々が何を感じ、どのように日常を過ごしているのかを理解しようとする姿勢の大切さを強く感じました。

滞在中は、文化だけでなく日常生活の一端にも触れることができました。特に驚いたのが、デリバリーサービスの充実ぶりです。アプリを通じて、さまざまな料理を簡単に注文でき、到着も非常に早く、生活に深く根付いたインフラとして機能している様子が見て取れました。私たちも実際に現地のデリバリーを利用し、その利便性を実感しました。

中でも印象的だったのが、麻辣燙（マールータン）という料理です。中国では広く親しまれ

ている料理で、ピリ辛のスープに野菜や練り物、麺が入っています。今回はデリバリーで注文したため量り売りではありませんでしたが、それでも十分にボリュームがあり、価格は日本円で 500 円程度と非常にリーズナブルでした。辛さと香りのバランスが絶妙で、一度食べたら忘れられない美味しさでした。地元の人々の食文化に少しだけ触れたような気がして、非常に嬉しく感じた瞬間でした。

これらの経験を通して、私の中での中国に対するイメージは大きく変化しました。確かに、日中関係や政治的な背景には複雑な問題もありますが、それ以上に大切なのは、現地の「人」に触れることだと気付きました。言葉が通じなくても、笑顔や姿勢、態度から伝わってくる温かさはどこか共通していて、「思っていたよりもずっと近い存在」だと感じることができました。

今回の訪問を通じて、「実際に足を運ぶこと」の重要性を心から実感しました。インターネットやメディアを通じて得る情報も有益ではありますが、やはり現地の空気を感じ、自分の五感で受け取ったことから得られる理解の深さは全く異なります。今後、どのような進路を選ぶにしても、この「自分で確かめる姿勢」を大切に、多様な価値観を受け入れながら成長していきたいと考えています。

グローバル化が進む現代において、国や文化を超えて他者と協働する力はますます求められています。今回の訪中経験は、そうした時代の中で私がどう生き、どう働くかを考える大きなきっかけとなりました。今回出会った人々とのつながりを今後も大切にしながら、自身の視野をさらに広げていきたいと思っています。

「他者の靴をはく経験を積む」

2-a 広島市立大学 木村美優

私は、今後中国と関わっていく上で以下の 2 つの姿勢を大事にしたいと考えた。一つ目は日本と中国の文化における共通点や相違点をよく知ること、もう一つは過去に日本が中国に（東アジアに）何をしたのかを知り、向き合い、考えることだ。日本（人）と中国（人）は同じアジア人でもあり、容姿が似ていたり、文化も共通するものが多い。だからこそ、ついつい日本（人）の価値観で中国（人）を見ようとするが、実際は双方違う文化も持ち、また違う歴史を中国（人）は見てきた。双方の違い、ギャップは何かを知り、そのうえで誠意ある対応をしない限り、友好な関係は持てないのではないかと考える。そのことに改めて気付くためにも、今回の訪中は私にとってかけがえのない原体験になった。私は今回訪中に参加し、一部ではあるものの、中国を実際に目で、耳で体感してきた。それによって日本のメディアでは報道しきれていない現地、人の様子を垣間みることができ、メディアの情報（事件報道）が全てではないことを改めて実感した。（訪中期間中、そういった側面を見かけなかった。もちろん、それは日中友好協会の方、中国政府関係者の方々の厚いサポートのもと安全を確保していただけていたからもある。）また多角的な視点から情報を選び理解することが、日本に帰ってきた自分自身に求められることだろう。中国へ行ってみての素直な感想として「ここは外国？（中国？）」としきりに感じた部分がある。つまり、自分がいるところが外国と思えないほど、私の出身、日本と似ている雰囲気や親しみを感じたのだ。例えば町中に見かける漢字。中国語をまったく習得していない私でもよくよく読んでみるとなんとなく意味が分かる。他には建物。住宅やビルもそうだが、特に親しみを感じたのが歴史的建築物だ。私たち訪中国は 2 日目に廊坊師範学院内の古建築博物館、また同日に河北省のシルクロード国際文化交流センターに隣接するアミューズメント施設、『只有紅樓夢・演劇幻城』を見学、そして最終日に天壇公園を訪れた。そこでは木造づくりや瓦屋根、文様のデザイン、そして歴史を感じる古典的な雰囲気が日本における神社や古い町並みに似ているように感じた。そもそも日本のそういった漢字や建物の姿は中国から取り入れた文化の影響が大きいので、似ていると感じるのは当たり前のことなのかもしれない。しかし、双方とも長い国の歴史を持ち、そしてその歴史や文化を大事にする心が一緒であること、そしてその文化には強い関係性があるのだと思うと嬉しかった。

一方で、訪中国として、そして特にこの派遣時期において意識せざる得なかったことが「抗日戦争勝利 80 周年」だ。日本にいと「終戦 80 周年」の表現の方がよく耳に思うと思うが、中国はそうではない。（後述する世界青年友好交流大会においてなんどもこの言葉「抗日戦争勝利 80 周年」は使われていた。）6 日目に参加した世界青年友好交流大会において中国側や、参列国代表によって発信されていた平和へのメッセージには共感するものがあったが、私が願う平和と相手の国の平和が共通していても、きっとそこに至るまでのプロセス（戦争史、歴史）はそれぞれ異なる。そう思うと、改めて平和を語ることは難しいと認識したと同時に、語り合って、話を聞いて、学んでいくしかないのかもしれないと考えるように

なった。この 7 日間で私は平和を考えるにあたって、自分の国（日本）の歴史観だけでなく、他の国の歴史観から考えた時はどういうプロセスで、どういう平和の願いがあるのかを考えたい、そしてこれから「他者の靴を履く」経験を積み重ねていきたいという気持ちを強くした。またこの 7 日間で悔やんだのが、中国語を習得していないために、ガイドさんの説明や資料館のパネルを十分に理解することができなかったことであったため、これを機に中国語学習も頑張りたい！

「知ろうとしなければ知らないまま」

2-A 信州大学 黒木遥

私はこれまで、中国に対して「一党独裁」、「言論統制」、「反日教育」といったネガティブな印象を強く持っていた。日本で流れるニュースや記事は、中国の問題点や批判的な報道が中心であり、政治体制や人権問題に関する情報ばかりが耳に入ってきた。実際に訪れたことはなく、経済発展や人々の暮らしについて知る機会はほとんどなかった。つまり、私は偏った断片的な情報だけで中国を理解していたのである。

今回、訪中国として廊坊市や北京市を訪れ、現地の人々と交流し、街を歩き、施設を見学したことで、その印象は大きく変わった。まず驚いたのは、施設の一つ一つの規模の大きさである。商業施設や中国国家大劇院、中国共産党歴史展示館などは、日本ではなかなか見られない広さと高さを備えており、その存在感に圧倒された。特に強く印象に残っているのは、廊坊市の「戯劇幻城」で観た大型舞台『只有紅樓夢』である。施設自体の広さ、舞台の奥行きと天井の高さ、客席の広がりはいずれも想像を超えていた。演出は空間全体を使い、光や音響も桁違いのスケールで展開され、日本で見るとはまるで異なる迫力だった。

また、日常生活におけるデジタル化の浸透度の高さにも驚いた。飲食店や売店では現金を使う人はほとんどおらず、QRコードによるオンライン決済が当たり前のように行われていた。観光施設や公共サービスの入場・予約もスマートフォンひとつで完結する。滞在中、財布を取り出す場面はなく、決済や手続きの速さ、利便性の高さに驚かされた。オンライン決済が生活に自然に組み込まれている様子は、日本よりもはるかに進んでいると感じた。

中国共産党歴史展示館では、100年以上にわたる党の歴史の中で、経済発展の推進や科学技術の発展に力を注いできたことを知った。日本ではほとんど報じられない政策や事業も多く、これまでの私は「中国＝問題が多い国」という単純なイメージでしか捉えていなかったことを実感した。

現地の人々との交流も印象的だった。廊坊市や北京市での歓迎は温かく、笑顔で接してくれる人が多かった。ダンスの練習をするための場所を探していた際、食事をしていたレストランで急にお願いしたにもかかわらず、快く場所を貸してくれたことがあった。予期しない状況でも柔軟に対応してくれる姿勢に、人の温かさを強く感じた。

今回の経験を通じて、「知ろうとしなければ知らないまま」という事実を強く実感した。限られたメディアからの情報だけでは、国や人々の本当の姿を理解することはできない。これからは一つの立場や視点に偏らず、複数の情報源や直接の体験を通して、良い面も悪い面も見極めていきたいと思う。そして、その理解を深めるために、日本と中国の歴史を改めて学び直し、過去から現在への流れを自分の中で整理したいと考えている。

この訪中で得た学びは、私の人生において大切な視点となった。このような機会をくださった日中友好協会の皆様をはじめ、招待してくださった中国政府の皆様、大変な天候の中受け入れてくださった廊坊市や北京市の皆様、そして全日程で移動の準備や通訳をしてくださ

ったチョウさんに、心より感謝申し上げる。

この経験を活かし、様々な側面から物事を捉えていきたい。そして今後も、何らかの形で中国と関わり続けていきたいと思う。

「平和をつくる世代として」

2-A 立命館大学 高井怜奈

今回、日中友好大学生訪中団の一員として中国を訪れる貴重な機会をいただき、多くの学びと気づきを得ることができました。今回の訪中は、当初予定されていた広州訪問が台風の影響で中止となり、北京での予定も変更されるなど、天候によって急遽内容が変更される場面が多々ありましたが、それでも各地での見学や交流を通して、日中間の理解を深める大きな一歩となったと感じています。

とりわけ印象に残っている場面は二つあります。一つ目は、中国共産党歴史展覧館の見学です。近現代における中国の歩みが、写真、映像、実物資料などを通して詳細かつ体系的に展示されており、中国の人々がどのように自国の歴史を学び捉えているのか、その一端を垣間見ることができました。と同時に、私は日本の歴史観や歴史教育について改めて考えさせられました。日本では、一般市民が歴史を深く学べる場としての公共の展示施設が限られており、日常的に歴史に触れる機会も少ないと感じます。こうした展示施設のように、自国の歴史に触れることができる空間が整備されていることで、若い世代も歴史をより身近に感じ、学ぼうとする意欲が高まるのだろうと感じました。そしてこのような中で、先人の苦難や努力への感謝や感銘、そして国に対する誇りといった、ある種の共通の感情が生まれやすくなるのだと思います。同時に、私はそこに一種の危うさも感じました。歴史の語り方が一方通行になってしまえば、それはやがて排他的な感情や過剰なナショナリズムへとつながってしまう可能性があります。歴史を学ぶ場が、暴力的な感情の正当化へとすり替わってしまう危険性も否定できません。歴史は単なる過去の記録ではなく、今を生きる私たちが未来をどう築くかを考えるための指針になります。その重みを受け止めるには、歴史がどのように語られ、どのように共有されるのかという視点が不可欠であり、展示空間の意義と同時にその難しさを実感することができました。

二つ目は、世界青年友好交流大会です。約 1700 人の中国国内外の若者が一堂に会し、自国の文化や考え方を語り、魅せる場が設けられていました。スピーチでは、具体的な日中戦争のエピソードが語られ、戦争による被害や影響、そして過去の過ちを踏まえた上で平和と友好を維持することの必要性について触れられていました。このスピーチを通して、歴史観の違いが根本にありつつ「平和」を目指すためには何が必要なのか、改めて深く考えさせられました。

私たちはしばしば、自分たちが教えられてきた歴史を「正しいもの」として受け止めています。しかし、今回の訪中では、中国の歴史観やその背景にある感情に直接触れることで、異なる視点を学ぶことができました。そうした違いは決して対立の原因になるものではなく、むしろ相手を理解するための入口になるものだと考えます。文化、制度、歴史観、生活スタイル、すべてが異なるからこそ、互いを知ることには意味があります。そこから何を感じ取り、どう考えるか、そうした対話の土壌を若い世代に用意することは、未来の国際関係や

平和の在り方を築く上できわめて意義深く、今回私たちが招待された背景には、そのような思いがあるのだと感じました。相手を知ろうとする姿勢、違いを受け入れる柔軟さ、そしてその思いを言葉にして伝える力を、これからも大切に育んでいきたいと思います。そして、こうした機会を次の世代へとつないでいく一人になればと、心から願っています。

最後に、幾度か予定が急遽変更される中、そのたびに即座に新たな日程が組まれ、滞りなく訪問が進んだことを忘れてはなりません。その支えがあったからこそ、私たちは学びと交流に集中し、充実した時間を過ごすことができました。私たちの見えないところで尽力してくださった訪中関係者の皆さまに、心より感謝申し上げます。

世界は広い

A2 / 熊本大学 / 高木奏子

今回は日中友好協会の訪中団に参加させていただき、大変光栄であり、私にとってかけがえない経験となった。わずか数日間の滞在であったが、これまでの価値観を大きく広げるものとなった。

まず強く印象に残ったのは、中国のおもてなしの心である。訪問先では常に食べきれないほどの料理が並び、飲み物が切れることは決してなかった。また、安全を第一に考え、移動や施設見学の際には細やかなサポートを受けた。中日友好協会の関係者や各施設のガイドの方々は、自国の歴史や文化に誇りを持ち、それを自信をもって伝えていた。その姿勢はとても力強く、同時に日本人としての自分の在り方を考えさせられた。

一方で、戸惑いや驚きを覚えた場面もある。私は中国語に不慣れであるため、英語でコミュニケーションを試みたが、時に嫌な顔をされたり、はっきりと拒まれることもあった。北京という国際都市でそうした経験をするとは思わず、驚きを覚えた。これが英語教育の違いからくるものなのか、それとも自国の言語や文化への誇りの表れなのかは断言できない。しかしその体験を通して、逆に日本に来た外国人がどのような思いを抱いているかを想像することができた。日本でも同じように、言葉や文化の壁に戸惑う人がいるに違いない。そのとき自分はどのように接しているのか、自らを省みるきっかけとなった。

さらに忘れられないのが、世界平和大会に参加した経験である。そこには中国だけでなく、世界各国から訪れた訪中団が一堂に会していた。会場はまるで地球そのものが凝縮されたような熱気に包まれ、私はその場にただで胸が高鳴った。今まで目にしたことのない伝統舞踊やリズム感あふれる音楽、独創的で華やかな衣装に身を包んだパフォーマンスが次々と披露され、世界にはこんなにも多様な文化が存在するのかと圧倒された。そして大会の中で最も忘れられないことの一つがスピーチである。平和を願う声、歴史を語る声、未来への希望を託す声があり、その一つひとつには、国や言語を超えて人間が共有できる願いが込められていた。しかしそれは決してすべてが私と同じ考えではなかった。歴史を異なる角度から解釈する人もいれば、私とは違う価値観を語る人もいた。その多様な言葉に耳を傾ける中で、私は「世界は広く、多様性に満ちている」と強く実感し、同時にその広さの中で生きている自分の存在を改めて感じた。そして、私たちは歴史的事実を学び、自分で思考し、自らの言葉で主張していく責任があるのだと痛感した。

今回の経験を通して、国交とは誰が担うものなのかを深く考えるようになった。これまで私は、国と国とが交わるときに表舞台に立つのは政治家や外交官、あるいは企業だとばかり

思っていた。しかし日々の生活を振り返れば、学友の中に中国から来た留学生がいる。街に出れば中国料理店で働く人々がいる。つまり、私たち一人ひとりも国交を形づくる存在なのである。その事実気づいたとき、日常の中で他者を尊重し、誠実に向き合うことが、世界平和の土台になるのだと強く感じた。そして私自身もその小さな一員であることを、これからは自覚して生きていかなければならないと思った。

さらに大きな収穫は、共に訪中した多彩な学生たちとの出会いである。私は医学部に所属し、日々を病院や研究室という限られた環境で過ごしている。そのため、どうしても世界を狭く捉えてしまっていた。しかし今回、国際的な政治、経済を学ぶ学生、複数の言語を学ぶ学生、各国で留学を経験している学生など、エネルギーにあふれた仲間と出会った。彼らと語り合う中で、自分がどれほど小さな世界に閉じこもっていたのかを痛感すると同時に、彼らの存在に誇りと刺激を感じた。それぞれの生き方があり、その多様さこそが世界の豊かさを形づくっているのだと実感した。

「世界は広い」。この言葉を、今回ほど深く心に刻んだことはない。自分の目で見て、耳で聞き、心で感じなければ決してわからないことが、世界には無数に存在する。医師を志す者として医学を学ぶことはもちろん大切である。しかし同時に、世界の多様性に目を向け、自分の価値観を磨き続けることもまた欠かせない。今回の訪中体験は、その第一歩として、私に大きな勇気と希望を与えてくれた。

「中国で私が感じたこと」

2A 班 中央大学 田邊実佑

訪中団参加の感想

私は先日、訪中団に参加し、中国の歴史、文化、そして人々と触れ合う貴重な機会を得ることができました。この訪問は、私にとって単なる観光旅行ではなく、異文化理解や国際関係の重要性を再認識するための大切な経験となりました。特に印象に残った点として、共産党歴史博物館で中国共産党の歴史に触れたこと、「只有红楼梦」での観劇、そして生活している中での中国の人々の温かさに触れることができたことが挙げられます。

中国共産党の歴史に触れる

訪中団の一環として、中国共産党の歴史について学ぶことができたのは、とても有意義でした。日本にはこのような党の巨大な博物館はありません。愛国心を高めるために習近平主席が作られたと聞いて、このような巨大な建物を作ることができる中国の偉大さを知りました。それと同時に、これは日本では作ることができないなとも感じました。

また、中国共産党が経済改革を進め、改革開放政策を実施してからの急速な発展は、まさに驚くべきものです。私たちが訪れた北京や河北省でも、近代的な建物やインフラが立ち並んでおり、その発展の様子を間近で感じることができました。これらの変化は、中国共産党が長年にわたり続けてきた政策と努力の賜物であると感じました。

「只有红楼梦」での観劇

次に「只有红楼梦」での観劇では **200** 年以上も昔の本である「紅樓夢」が今でも愛されていることを知りました。私の周りで劇が繰り広げられ、すごく美しい舞台でした。それほど昔の小説が今でも愛され、舞台になっているのは本当にすごいと感じました。また、日を避けるすだれが原稿用紙になっていて、紅樓夢の物語が書いてあったりし、細かいところまで手を入れられているところに感動しました。

中国の人々の温かさ

訪問を通じて最も印象に残ったのは、中国の人々の温かさでした。初日に中国に足を踏み入れたとき、私は少なからず文化や言語の違いに戸惑いもありました。しかし、中国の人々は非常に親切で、私が困っているとすぐに助けてくださいました。

また、観光地やレストランでも、スタッフやガイドの方々はとても親切で、私たちに対して

温かい笑顔を見せてくれました。現地の方に中国語で話しかけた時に「你的汉语还不错」と言ってくれたことでさらに話しかけることができました。おすすめのお土産を聞いたり、ここはどのような建物かを聞いたりすると「これが美味しい!」と持ってきてくださったり、売り場まで連れて行ってくださり、すごく助かりました。

異文化理解の重要性

訪中団としての滞在を通じて、私たちはさまざまな文化的な違いを経験しましたが、その中で感じたことは、異文化理解の重要性です。中国は日本と歴史的な背景や文化が異なりますが、私たちが相手を理解し、尊重する姿勢を持つことで、より良い関係を築けることができると強く感じました。特に、私たち日本人と中国の人々は、過去の歴史的な問題においても時折対立してきましたが、お互いの立場を理解し合うことで、未来に向けて協力し合えることを実感しました。

中国では、社会全体での「共生」の精神が根付いていると感じました。共生という考え方が、経済の発展や都市の変化を牽引する原動力になっているように思えます。私たちも、共生と調和を大切にしながら、今後の発展を共に模索していかなければならないと強く感じました。

まとめ

今回の訪中団の参加は、私にとって非常に貴重な経験となりました。中国共産党の歴史や文化、そして中国の人々の温かさに触れることで、国際的な視野を広げることができました。今後も、異文化を尊重し、自分本位になるのではなく、理解し合うことの大切さを忘れず、より良い国際関係を築いていくために、自分にできることを考えていきたいと思います。最後に、訪中団の活動を通じて、多くのことを学び、成長することができたことに感謝しています。

「底なしの魅力」

2-A 桜美林大学 平塚名

訪中前の私にとっての中国は、常に文化や人を通じて身近だった。書道に親しみ、池袋では本格的な中国料理を堪能し、中国出身の友人たちとも交流してきた。最近旅行として行ったニューヨークでは、カオスなチャイナタウンがお気に入りだった。

一方、両親はどちらかというと否定的で、私は中国に対するネガティブな意見を聞いて育った。しかし大学やカナダへの留学先でできた中国出身の友人と交流していくうちに、周囲の評価とのギャップを感じるようになる。ニュースや SNS で常に見聞きしている割には、中国に対してははっきりとしたイメージがなかったので、自分の目で確かめるべく今回の訪中団に参加した。

実際に中国を訪れて、正直に言えば、むしろ謎が深まった。特に大きな驚きも落胆もなかった。ポジティブでもネガティブでもない、言語化できない気持ちを抱いた。この感覚は私にとって新鮮だ。まだモヤモヤとした感覚だが、私なりに五感でとらえた中国を記録していく。初日、夜到北京に到着し、空港から廊坊のホテルに向かう途中の赤いネオンサイン、バスの外の暗闇に並ぶ、数々の一様に高く四角い建物が印象的だった。移動中、一軒家を1度も見なかった。ホテルでの朝食はビュッフェ形式で、品数が多く、果物や野菜が充実していて朝から心身共に満たされた。翌日、廊坊を移動していると初日は気が付かなかった赤い看板がたくさん目に入ってくる。努力、現代化、希望、国家、という文字が並ぶ。訪問先のシルクロード国際芸術交流センター、中国共産党歴史展覧館、红楼梦の体験型演劇パークである只有红楼梦など、建物の規模が日本の倍はあるような光景は、うっすら夢を見ているような感覚であった。連日蒸し暑くて、テレビ塔から見下ろした北京はもやで包まれていた。

中国語は全くできないが、何度か本格的に中国語を学びたいと思う瞬間があった。ひとつは、展示の解説の時だ。班ごとにガイドさんが付いていて、人によって翻訳の仕方が違う。列の後ろの方において他のガイドさんの日本語の説明も聞いていたのだが、印象が違ったので、原語のまま理解できればより面白そうだったと思った。例えば楽器に合わせて踊っている人形達を、ある人は、単に「楽しそうでしょう」と表現する一方「みんな嬉しそうな表情ですよ、幸せな時代だった」と表現していたのが印象的だった。

基本的に都市でも、若者でも英語を話す人は少なかった。現地で決済が上手いかず、レジ担当の女性と翻訳を見せ合って、お互いオロオロし、苦笑いをし合っていたが、応援がくるなり声色が変わり何かまくし立てていた。知らなくて良かったことかもしれないが、是非とも様々な場面の中国語を理解できるようになりたい。

今回の面白い発見は、話し相手の影響を受けて、1年、いや1か月単位で中国に対する私の認識が変わっていくということだ。中国出身の友人たちがいるので、政治などについてある程度聞いて理解していたつもりだが、それが事実ではないとの主張も聞いた。それほど視点や関わる人によって中国への理解が変わるのだ。何事もそうだが、個人的に、特に中国は学

べば学ぶほど謎が深まると感じた。特に様々な人の意見を聞いて多角的にみなければいけない。入念に勉強してから語ろうと思った。

謎が深まったと書いたが、一方で人々は良くも悪くもストレートだった。特に愛想笑いをしない、相手の意図が分からなければ思い切り怪訝な顔をする。都合が悪いならすぐに断る。中国の好きなところは何かと聞かれれば、この素直さを挙げる。

1週間だけでは何も分からないに等しい。普段の食事、生活、話題などもっと迫って知りたいと思った。こんなに興味をそそられる国は初めてかもしれない。

日中友好には、同じ人間として尊重し理解し合う、というような漠然としたまとめで完結せず、よく知ろうとし、多角的に学び、実際に触れて中国を捉え続けたい。

最後に、今回の訪中団にご尽力いただいたすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。特に今回は天候の影響もあり、対応にご苦労が多かったことと存じます。本当にありがとうございました。

大雨で予定変更がありましたが、最後の夜はきれいな、大きい三日月が見えました。

遠かった隣国、近づいた実感
慶応義塾大学理工学研究科
宝珠山理歩

日中友好協会の訪中国の一員として中国を訪れて、現地で感じたことをまとめる。

私は物心ついたころから、どこか中国に対して距離感や不信感を抱いていた。中国系の友人が身近におり、就職予定先の同期にも中国出身の人が多いことから、日本にとって「身近な国」であることは十分に理解していたが、それでも実際の社会や文化については、自分の中でどこか他人事のようにとらえていたのだと思う。今回の訪中は、そうした表層的な認識を改める機会となった。特に、都市のスケール感や歴史の厚み、そして文化を伝えるための展示や工夫に驚かされ、日本とは異なる価値観に多くの刺激を受けた。

現地で最も強く感じたのは、あらゆる“スケールの大きさ”である。もちろん、領土が広大であることは頭では理解していたが、実際に目で見ても肌で感じてこそ得られる実感があった。郊外の廊坊市はもちろん、首都・北京の都市部においても、道路の幅、建物の大きさ、敷地の使い方のすべてが、日本とはまったく異なる。むしろ、日本が全体的にコンパクトすぎるだけなのかもしれないが、欧米諸国を訪れたときにもあまり感じたことのない、土地のゆとりと開放感を強く印象づけられた。

また、恥ずかしながら私は今回の訪問で初めて「天壇公園」という場所を知った。他の参加者の多くも知らなかったようで、日本では「故宮」や「万里の長城」の陰に隠れてあまり知られていないこの場所も、世界遺産に登録されているという事実に、改めて中国の文化的な厚みを感じた。今回の旅では予定変更が重なり、期待していた有名な観光地に行けなかったという悔しさも残るが、一瞬でも中国の歴史に触れられたことは、大きな収穫であった。

個人的に印象深かったのは、博物館の見学である。私は理工学系の学生ではあるが、文学部にも通い学芸員資格を取得したほど博物館が好きである。今回大劇院で観覧した展覧会は、海外から訪れるのにはやや地味な内容であったようにも思うが、展示方法そのものに興味があるため、非常に楽しめた。展示空間は日本の博物館と似た印象を受けたが、大きな違いとして“テクノロジーを取り入れようとする意欲”を感じた。液晶が組み込まれた展示ケース、触ると反応するインタラクティブな壁面演出など、日本ではあまり見られない工夫があり、技術と文化の融合にも刺激を受けた。

中国共産党歴史展覧館の展示はより興味深かった。貴重な史料の実物展示に加え、関連する歴史的写真の大型パネル、実際に活躍した人物の模型やシーン再現など、複数の要素を一体化させた展示からは、まるで歴史を“体験する”感覚を覚えた。こうした複合的な展示は新鮮で楽しく、感心させられた。

日本で博物館は、「堅苦しい場所」として敬遠されている節があるが、その背景には展示の

工夫の少なさや発想の硬直性があるのかもしれない。今回訪れた中国の博物館では、来館者の関心を引きつける演出が随所に見られ、知識を伝えると同時に、体験としても楽しめる空間がつくられていた。文化の伝え方に対する姿勢の違いが印象的であり、日本の博物館にも学べる点は多いと感じた。

そして、訪中団として訪れたからこそ得られた貴重な機会が、北京外国語大学の日本語学科の学生との交流である。一棟丸ごと日本語書籍で埋め尽くされた建物の大きさに驚かされ、出身国でもない日本について、学生たちが情熱をもって深く学んでいる姿に心を打たれた。さらに、世界各国から若者が集う「世界和平大会」に参加できたことも、訪中団の一員であったからこそ得られた経験であり、国際的な視点で平和を考える貴重な機会となった。戦争のない国で育った日本の若者として、平和の重要性を「実感をもって語る」ことの難しさを痛感すると同時に、だからこそ意識的に考え続ける責任があると感じた。私たちは、直接的に戦争を起こした世代ではない。しかし、世界の多くの人々にとって「日本」という国は、今なお第二次世界大戦と結びついた記憶として存在している。その歴史の重みを見捨てることはできない。過去の責任をただ背負うのではなく、未来に向けて何を語り、どう行動するかが問われていると感じた。

今回の訪中は、天候による行程変更もあり、当初の期待とは異なる展開が多かった。それでも、現地での出会いや発見に満ちた、意義深い旅となった。中国のスケールや歴史、文化を伝えるための工夫には多くの刺激を受け、実際に人と対話しながら学ぶことの重要性を改めて実感した。中国という国が、より具体的で現実的な存在として捉えられるようになった今、違いを恐れず、学び合い語り合う姿勢を大切にしていきたい。

2025 年夏、中国訪問を通じて考えたこと

東京大学経済学部 4 年 三矢法和

初めに、今回天候不順で大変な中で様々な調整、対応をしてくださった中国の関係者の皆様、そしてお忙しい中時間を割いて私たちの安全を見守ってくださっていた随行員の方を含む協会関係者の皆さま、並びに今回訪中国の企画に向けて携わって下さった全ての方々に深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

今回の中国への訪問を経て、私が特に強く感じた「歴史を的確に捉える難しさ」そして「日中友好と平和のこれから」という 2 つのテーマについて、考えを述べたいと思います。

一つ目のテーマは、歴史を的確に捉えることの難しさです。北京の中国共産党歴史展覧館を訪問した際、私はそのことを痛感しました。日本の教科書で学んだ歴史、特に第一次世界大戦以降の日本の歩みについて、自分がいかに一面的にしか理解していなかったかを思い知らされました。中国側の視点で当時の写真や映像を目の当たりにし、自分が知らず知らずのうちに、日本からの視点という「バイアス」を通して歴史を見ていたことに気づかされました。一方で、ではバイアスが入らないように、歴史を人々の感情を無視して単なる「事実」の羅列として理解すれば良いのかと言われれば、私はそうは思いません。歴史とは人々が紡いできた物語である以上、そこにあった一人ひとりの感情も決して無視してはならないはずです。では、どうすれば私たちはより深く歴史を捉えることができるのか。今回の経験から、私は今後二つのことを心掛ける必要があると考えました。一つは、自分のもっている歴史観が絶対的に正しいと思いたくないこと。そしてもう一つは、海外のニュースなどの情報にも積極的に触れ、常に多角的な視点から歴史を見つめ直す努力を続けることです。

二つ目のテーマは、日中友好と平和の実現についてです。その可能性を強く感じさせてくれたのが、北京外国語大学の学生たちとの交流でした。彼らとの対話の中で、私は忘れられない発見をしました。老後の生活の話をしていた時、異なる文化で育ったにもかかわらず、「老後にやりたいこと」が皆驚くほど似ていたのです。世界中を飛び回ってみたい、趣味に時間を使いたい。そんな夢を語り合う中で、私たちは国籍や歴史的背景以前に、同じような幸せを願う一人の人間なのだと心から感じました。この瞬間、私は日中友好と世界平和は必ず実現できると確信しました。しかし同時に、そのための重要な課題にも気づかされました。今回、私たちがこれほど深く語り合えたのは、相手の学生たちが日本語に堪能だったからです。真の友好関係が一方の努力に頼るものであってはならないはずです。相手を本当に理解するためには、自分自身が相手の言葉を学び、歩み寄る努力が不可欠であると痛感しました。多角的に歴史を見つめ直す重要性。そして、直接的な交流を通して得た友好への確信と、言語という課題。今回の訪問は、私に多くの学びを与えてくれました。それに加え、もう一つ強く感じたことがあります。それは、一種の「危機感」です。街の至る所で普及するキャッシュレス決済、ホテルで働くロボット。中国社会の先進技術が人々の暮らしに深く浸透している様子は、日本が学ぶべきことが沢山あると感じました。この現実を前に、私は「知らなか

った」では済まされない、と痛感しました。歴史や文化の相互理解だけでなく、社会や技術といった分野でも、私たちはもっと隣国から謙虚に学び合わなければならない。そうした切実な想いの中で、平和の祭典でスピーカーが仰られた次の言葉が思い出されます。

「平和とは、日々の積み重ねの先にある」

歴史認識の壁を乗り越えようと相手の視点を学ぶことも、言語を習得し心を通わせようとすることも、そして、相手の優れた点から学び、共に発展していこうとする交流も、すべてが未来の平和に繋がる、地道で、しかし最も確実な「日々の積み重ね」に他なりません。この言葉を新たな誓いとして胸に刻み、まずは自分自身の課題である語学の学習から、その一歩を踏み出したいと思います。この小さな一歩が、いつか日中両国の真の友好と、互いの発展に貢献できる礎の一部になると信じて。

最後になりますが、このような自己変革の機会を与えてくださったすべての関係者の皆様に、改めて心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

「訪中体験から考える日中関係と相互理解について」

2号車 A 班 朝日大学 棚瀬夢子

2025 年 7 月 23 日から 30 日まで、私は日中友好協会が主催する日本青年代表団の一員として、中国・北京市および河北省を訪問した。今回の訪中は、日中両国が交流を深め、お互いの文化や社会について理解を広げることを目的としており、さらに戦後 80 周年という節目の年に行われたことから、非常に意義深いものであった。

訪中初日、広州を経由して北京に到着し、そのまま河北省廊坊市へ移動した。翌日は廊坊師範学院を訪問し、中国各地の歴史的建造物の模型や文化財の展示を見学した。ガイドの説明を通じて、中国の歴史的背景や地域ごとの文化的特徴を学び、教科書では味わえないスケール感と多様性を体感した。その後は「紅樓夢」をテーマにした劇場や、シルクロード国際文化交流センターを見学し、中国文学や芸術の豊かさを肌で感じた。

北京市に移動してからは、中央電視塔や国家大劇院など、現代的な都市景観と文化施設を巡った。どれもスケールが大きく、映像や写真で見る以上の迫力があつた。中国共産党歴史展覽館では、中国の近現代史や社会の変遷を学び、日中関係の歴史的背景についても深く考えさせられた。宋慶齡基金会では、福祉や教育、国際交流など幅広い分野での活動について知ることができ、中国社会が抱える課題とその解決への取り組みを知る貴重な機会となった。北京外国語大学では、日本語を学ぶ学生たちと交流した。流暢な日本語で話しかけてくれたことで距離が一気に縮まり、お互いの文化や大学生活について率直に意見を交わすことができた。日本の食文化やアニメ、中国の伝統行事や学生生活など、話題は尽きず、笑顔が絶えない時間だった。こうした相互理解の場は、日本では決して得られない生きた学びを得る貴重な機会であつたと感じる。また、冬季オリンピック関連施設や商業施設を見学し、国際大会が都市や経済にもたらす影響を実感した。天壇公園では、壮大な歴史的建築物と市民の生活が自然に調和する光景に、北京という都市の懐の深さを感じた。

今回の訪中は、現地での見学や交流はもちろん、日本から参加した学生同士の関わりも大きな財産になった。参加者はそれぞれ異なる分野で高い知識や経験を持っており、意見を交わす中で多角的な視点から中国を見ることができた。仲間たちの姿勢や考え方に感化され、自分もより広い視野と深い知識を持ちたいという思いが強まった。また、戦後 80 周年という節目に中国を訪れたことで、両国の過去と未来について深く考えるきっかけを得ることができた。

この経験で得た学びや気づきを今後の学業や活動に活かし、日中両国の架け橋となるよう努力していきたい。